

7-14 水鳥

琵琶湖の湖岸域には多様な水鳥が生息しています。特に冬期は水鳥の種数や個体数が多く、琵琶湖が国際的に重要な湿地である根拠となっています。春から夏にかけては湖岸域の孤立するヨシ群落で水鳥が繁殖します。

1. 湖岸で越冬する水鳥の増減

琵琶湖の湖岸は、特に冬期はカモ類を始めとする10万羽以上の水鳥の採食・休息場所として利用されており、水鳥等にとって重要な生息地となっています。琵琶湖には、ラムサール条約で国際的に重要な湿地であると判定される水鳥の個体数2万羽をはるかに超える水鳥が生息しています。

この20年間に越冬個体数の顕著な増加が見られた種は、マガモ属のうちでも水草を主に採食するヒドリガモ、オカヨシガモ、ヨシガモ、湖底の貝類や水草の越冬芽などを採食するハジロ属のキンクロハジロ、ホシハジロ、そして潜水して水草などを採食するクイナ科のオオバンであり、これら6種で琵琶湖の湖岸で越冬する水鳥個体数の約6割を占めるまでになっています。しかし最近では、水草の優占種が変化したことなどからか、これらの種の個体数は頭打ちか減少傾向にあるようです。

また、これら6種と亜種オオヒシクイ、ミコアイサ、カンムリカイツブリ、ハジロカイツブリ、カワウの計11種の個体数は国際的に重要な湿地と判定されるラムサール条約の1%基準値を超えています(表7-14-1)。

一方、昼間は湖岸で休息し夜間に農耕地で採食するマガモやコガモ、潜水して小型魚類を採食する県鳥・カイツブリは減少しています。コハクチョウや天然記念物となっている雁の一種オオヒシクイの越冬数は、積雪や琵琶湖の水位変化によって大きく変動します。内湖や水田で過ごしていることもあります。

2. ヨシ群落で繁殖する鳥類の増減

琵琶湖湖岸には孤島状にヨシ群落が残っています。大面積のヨシ群落では、カイツブリ、カンムリカイツブリ、ヨシゴイ、サンカノゴイ、カルガモ、バン、オオバンといった水鳥やヨシの茎に巣を架けるオオヨシキリ、コヨシキリが繁殖しています。しかし、県鳥・カイツブリの繁殖密度は1980年代に大きく低下しました。サギ科のサンカノゴイとヨシゴイは絶滅の危機にあります。

一方、カンムリカイツブリとオオバンの繁殖分布は拡大しています(写真7-14-1)。カンムリカイツブリは1991年に初めて琵琶湖の南湖東岸と北湖西岸で営巣が見つかっていましたが、2000年代には北湖東岸でも繁殖を始めました。オオバンは1980年に北湖東岸で繁殖が初めて確認され、その後、1990年代には琵琶湖全域で繁殖するようになりました。

これらの水鳥の増減要因としては、外来魚の増加による魚類群集の変化、沈水植物群落の繁茂などが関係していると思われます。

表7-14-1 主要な越冬水鳥の個体数とラムサール条約の基準

種名または個体群名	1%基準値 (2012年)	琵琶湖			算定%		過去3年間で 1%基準を超えた回数
		2015年	2016年	2017年	最小	最大	
ヒシクイ亜種オオヒシクイ	75	258	209	277	2.79%	3.69%	***
コハクチョウ	1,000	29	17	101	0.02%	0.10%	
オカヨシガモ	7,100	4,731	7,264	2,401	0.34%	1.02%	*
ヨシガモ	830	3,237	3,467	1,254	1.51%	4.18%	***
ヒドリガモ	7,100	13,161	14,097	13,791	1.85%	1.99%	***
マガモ	15,000	10,820	11,137	8,070	0.54%	0.74%	
カルガモ	11,300	5,200	3,726	3,446	0.30%	0.46%	
ハシビロガモ	5,000	73	190	78	0.01%	0.04%	
オナガガモ	2,400	1,061	984	1,356	0.41%	0.57%	
トモエガモ	7,100	233	6	85	0.00%	0.03%	
コガモ	7,700	3,543	2,159	1,526	0.20%	0.46%	
ホシハジロ	3,000	7,040	9,278	3,022	1.01%	3.09%	***
キンクロハジロ	2,400	14,141	16,186	14,475	5.89%	6.74%	***
スズガモ	2,400	1,114	806	1,421	0.34%	0.59%	
ホオジロガモ	10,000	219	229	332	0.02%	0.03%	
ミコアイサ	250	1,436	1,217	1,512	4.87%	6.05%	***
カワアイサ	710	460	604	469	0.65%	0.85%	
ウミアイサ	1,000	51	96	152	0.05%	0.15%	
カイツブリ	10,000	303	320	279	0.03%	0.03%	
カンムリカイツブリ	350	2,581	2,560	3,214	7.31%	9.18%	***
ハジロカイツブリ	1,000	2,740	3,305	2,501	2.50%	3.31%	***
カワウ	1,000	1,424	1,492	1,308	1.31%	1.49%	***
オオバン	20,000	59,095	82,928	32,005	1.60%	4.15%	***

1%基準値：亜種または東アジア個体群(亜種オオヒシクイはオホーツク/カムチャツカ-日本個体群)の1%の個体数「Waterbird Population Estimates」第5版(Wetlands International 2012)
琵琶湖2015～2017年：日本野鳥の会滋賀による調査



写真7-14-1 繁殖期の分布が拡大しているカンムリカイツブリ(左)とオオバン(右)

龍谷大学 須川 恒・名城大学 橋本 啓史

【1%基準値】水鳥の種または個体群(東アジア個体群)の総個体数の1%で、この個体数を超える種が1種でも定期的に渡来する湿地は国際的に重要な湿地とされます。基準個体数は数年おきに改定されます。